

診療時間
午後三時より
六時まで
高岡専太郎
コンセレーロ
フルタード街四
電話二一四〇七五

か受けて來てゐるからだ、然しな
がら一度ば財産でも出来、社會
上の地位でもきまると、其所に
學校教育の有無がモノを云つて
來る、即ち家と觀望し床の間を
拵へたが、サテ掛物がないと何
となく淋しいが如く、地位財産
が出来て餘になつて、教育の無
い者はどうも風味に乏しく、話
が片寄つて面白くない、植民地
における初期の學校教育の價値
は此邊のところである、これと
でも決して生活の根本をおびや
かすものでなく、あるは無きに
勝る程度のものである、その爲
れが爲めである

高等教育を受けてきた者を見
よ、その内の果して何人か
心配なくおまんなを喰つてゐ
るに決して彼等の罪ならず、
に日本の教育制度の罪である、
時代は三四十年来過ぎてゐる
に、まだ明治二十年かかの主
方針を固守して古臭いことを
してゐる、我等は決してそん
物まで受繼いで眞似てはなら
ない、植民地は殖民地であり
に當つて其教育を考へねばな
い、吾人が在留日本人の抱く
育能觀を屬倒するのは全くさ
る爲めである

革命軍部の豫測

憲政實施の時機に就ては選舉法起草委員長アシスブラジダを以て全國の民主派並にナリルオランダ解放黨は當初より即時斷行を主張して居るがオズワルド・アランニヤ氏を首班とする政府派並にジュアレストボラ、ミダ

革命軍部の豫測

領と雖も一日も早く憲政の道に復歸されたい希望であるに相違ない。此際市民とては政府を助けて只管革命業の完成につとめ榮ある議政治の復歸に盡力しなければならぬ。

此官によるときは憲政復歸は

埒明かず

べき要を固めてゐる。其の代表として、ミゲル・オスカー將軍の如き過激も新聞紙上に左の發表をしてゐる。憲政議會の即時召集問題は甚だデリケートなもので、經々く之をを論斷せられぬ、政今その期日を明確にするは不可能の事情に在る。但今日凡そ豫想するべきは選挙法案の發表後の批判期を二ヶ月とし之が公布後選挙人登録に少くとも六ヶ月を要すると思へば、ならす其後各政黨の宣傳候補者の擁立承認等の爲には矢張り數ヶ月を要するから革命事業の基礎工事の完成と共に今後恐らく三十四ヶ月は掛ることと思はれる。素より文化の進んだ國家に於て獨裁政治を行はざれば國がアルガス大統等革命最高幹部會合し、

ガアルガス大統領の内意を受けて、タリオリ・オグランドより出府、タリオリ・オグランドに使用した南リオリ・オグランド執政官、フロレス・タリオリ氏は一兩日滞在オレガリ州政府並にミナス自由黨幹部共和黨との間に何等かの妥協を見出すべく奔走したが遂に別の進捗も見ずして空しく歸した。爾來カデ、宮ではミナスに對し連日協議を重ねるあり去三日には特に

大統領始めアランニヤ法相、アメリカ選相、カストロ陸軍大臣、エネス海相、クニニョ、タボラ少佐

聯邦

後任はブラド氏

報の如くブラジル銀行總
オブラント氏は五日タブ
大統領に對し辭表を提出
其原因につき傳へらるゝ
其
氏がミナス政争に連座し
職せるといふは全く表面
由で實は同氏就任以後に
のブラジル銀行内に行は
不正事件が最近革命裁判
持出され近く判決されん
情勢に在るので到底其
安んずるを得ず遂に自決
に至つた

入問題が依然煮え切らな

つて共和黨側如何と
黨幹部にしてブラジル
の著名マリオ・オラン
ド・ソウザ・デ・アル
メイダ・フレイタス氏
を提出して野に下
す。ロ・フランコ氏も或は
かも知れぬ形勢となつ
た。此等の事實を綜合し
てミナス問題は今や一
地に非ずして中央政界
の一大問題となつた。こ
れがミナスが今
の半を負擔し而も
成敗せし州長を文

大事に至らず

西日午前三時イオ州ニテ
 於て暴動が起きたが聯
 海軍直轄府警兵隊並に
 が直ちに鎮壓に向つたの
 原因
 半全く鎮定した、原因
 軍人へ大佐に昇進し、
 ソアレス氏が其後失
 置かれたのに憤慨して
 而らひ兵を挙げたので一
 警察署監獄等を占領し
 なく官軍の爲に奪回さ
 レス大佐は其場で戦死し

三層座

ブラジルの海運業

近年代は特にならず、
 ジルでは最初イデオが本
 船内或は海岸地帯並に河川
 航路に於て使用されてゐた。
 十五世紀に至りては、つ
 づつ南洋航海の熱心となり、
 ブラジルの発見されるに及
 び、始めて帆船が知られて來た。
 × × ×
 ジル発見後最初の三世紀間
 南和、佛三國人がブラジルの
 産業を獨占し、ポルトガルの
 王は其の時分（一八〇八年）
 既に沿海航路は素より遠く
 國英、米並にアフリカ及び
 の葡萄牙屬地を盛んに
 してゐたのであつた。
 伯國側に於ける主たる港は
 フロレス、ロイオ、バイヤ及び
 トレス、此等の港には年約七
 千二百隻の船は出入し、礦物、棉花、
 カカオ、その他の特産物を世
 市場に搬出したものゝつた。
 一八〇八年一月二十八日領内に
 ありける港が開放され航海の自由
 許されたが、それ以來も通商貨
 物の外國船ばかりで、伯國船は
 少なかりしに、海軍警備に當つては通
 常に於ては、そして一八二二年
 以後やうやく貿易船としてのや
 び、船の建造修繕等も行は
 れ不完全ながら船渠も建てられ
 國に於ては八千キロ米突に近い海
 峽を有し、物産豊かに海運國た
 るべき必属性ある上、森林中には
 船材材料として、きよ優良材に豊富
 船船時代に於ける造船には頗
 好都合であつたが何時も外國
 船に先を越され、伯國人は其後
 を押しては過ぎなかつた。斯
 して十九世紀に入り、蒸氣汽船

の發明あり、今迄の帆船は漸次汽
 船に代えられて行つた。
 × × ×
 一八〇〇年迄はブラジルの海運
 業は全く見るべきものがなかつ
 たが、それ以後政府は補助金を
 支出して、外國に造船の補助金を
 せしめ、なほとして海運の振興に盡
 したが、それでも一八九〇年頃ま
 では辛うじて既得の航路の喪失
 を免がれた程度に留まり、諸外
 國船が同期間に一四〇〇%の増徴
 を來せるに對比すれば、全く心細
 い状態であつた。
 一八八〇年より港に入港した
 伯國船は三十五隻、一八九〇年
 は四〇三隻、五十年間に五%
 の増加を見たに過ぎないが、同
 期間に外國船は一〇五隻より
 二四九隻即ち一四〇%の増加
 を見た。
 其後沿海航路が内國船に限
 ることになつてから漸次外國船
 を驅逐して行つた。
 伯國船を其航路によつて分ける
 と次の四つとなる
 一、沿海航路（遠）
 二、近海航路
 三、河川航路
 四、内河航路
 其一に屬するはリオを起點と
 して、サンバ、ベルナンブーロ
 バラ、サンヴィセンテ、バル
 バード、リスボア、マルセ
 ーユ經由英吉利、白耳義、佛
 蘭西、伊太利、獨逸及び北米
 合衆國間を航行するもので、ロ
 ショナル二社が之に當り、大
 戰後北米航路には獨逸より、大
 沒收船之に配した（此獨逸
 船の公薩でロイドブラジレイ
 ー社の船は倍になつた）。其二
 はリオを中心として、各州首府
 間を航行するもので、其三は沿

海各州間の殆んど總ての港
 行するもの、河川航路は河
 川並に灣内の舟行で主として
 地方的物産の運輸を司る。
 此内前三者は何れも其本店をリ
 オに有し、歐米諸國並に國內に於
 ては、ワイトリ、バイヤ、マセ
 イオ、レシタフエ、バライソン
 ナタール、セアラ、アマゾン
 マリニオン、ベレンより南はサン
 トス、イグア、ベカナナ、パ
 ラナグア、インティエー、サンフ
 ランシスコ、アイタジャ、フロ
 アポリス、リオグランデ、ペロ
 タス、ポルトアレグレ等、に寄港
 し、此南航は其後遠くモンテヴィ
 デオ、ペノスアリスからバイ
 アランカ迄延長された。航路
 の延長はリオよりアマゾン上流
 のマナオス港まで三千二百五十
 八哩南は同じくリオよりポルト
 アレグレ迄九百三十五哩、ペノ
 ス一千里二百五十五哩である。
 近海航路の本據はリオ以北はバ
 リニオン、ベルナンブーロ及び
 バイヤに在り、此等の航路の砂
 航路は何れもロイドブラジレイ
 ー、ナヴェガシオン、ナヴェガシ
 コム、メルシオン、ナヴェガシ
 イドナシヨナル等の諸社並に其
 他個人のものであつた。
 河川航路でもアマゾンのそれ
 世界第一と稱せられ、其文流に
 るときは二十餘日を費すもの
 ある。

就帆船はアマゾン汽船、ロ
 ドブラジレイロ、トカンチ
 等の會社並に個人所有のもの
 である。内ロイド社はパラ州
 府と契約し、カシウバ、カ
 エーラ、シャワエス、イ
 アノイリツザ、カイラ、ア
 アナジヤス、モコーエス、アラ
 サ及びサルガードに寄港す
 ことに定つてゐる。


 日伯社へ………
 鮮明、迅速、廉價
 紙袋、兒童用カデルネツタ各種
 封筒、用箋、ゴム印、帳簿、製本
 一切の御用命を承ります
 營業部
 聖市リマルダニア街一四六
 電二一三九二六 郵三七五
 (一、御送金の柏質は當店にて受取た



大坂商船株式會社

◎日本より
南米線(北米バナナ經由日本行)
プエマヌアイレス丸
十月十四日サントス着

◎日本より
東阿延長線(南東阿經由日本行)
アフリカ丸
九月廿六日サントス着

◎日本より
日本へ
ラブラタ丸
九月廿三日サントス着

◎日本より
日本へ
アフリカ丸
十月十二日サントス着

◎日本より
日本へ
アフリカ丸
十月十六日サントス着

日伯をつなぐ
定期航路
【各線共命令定期毎月一回】

○日本より家族御呼寄船賃支拂便法は左記
御照會願ひます

サントス駐在員
酒寄守

代理店

SANJO-HOLDER BROTHERS & CO. LTD.
Rue do Commercio, 35 - Caixa Postal, 239

S. PAULO - THEODOR WILLE & CO. LTD.
Rua Liberto Badary, 22 - Telex 4-3523

Caixa Postal, 388 SANTOS

御照會願ひます

英資本團の買収運動

總裁來聖したニー・マイヤ氏の建
言に基き聯邦政府は其所有にか
ゝるソロエスナ鐵道を手離すこ
とに略々決定を見た模様である
が政府の此決意を見るや英國資
本家は猛烈な買収運動を起した
がソロカバナ鐵道を所有する望
めるかも知れない

間近に迫る

である。左派は議院道はマトロポリツ州の奥まで延長し他日ボロピア國境に至つて大陸斷斷の豫定なのでたゞに經濟的事情のみならず國防上にも重大意義を有する所から之を外國資本團へ賣渡す或は租借せしむるは國家上採るべからざるものとの見解を發表せるに當り、憲政の常道に反するは今一ヶ月後同であるがそれ等軍部の主唱するサンパウロ革命軍團は來る廿四日純政黨としての發會式を舉行することに決定先月より幹部ウリシオン・ゴーフランド氏は地方遊説に出掛けてゐる、發會式當

聖州政府は「更に減俸斷行か」
緊縮の徹底を期す

緊縮の徹底を期す

マリオ・ブランド氏後任として第一候補に推されたヌマ・デ・オリベイラ氏は聖市大蔵長官に就任したばかりではあり且此職に在つて大いに自己の經綸を行ふ決心を有つて居る際とて辭退したのでウイタケル藏相は更に聖市銀行のウイセンテ・アルメイダ・ブラード氏に交渉の結果其承諾を得、ブラード氏は昨九日就任した

として官吏の減俸を決し俸給税の形に於て給料支拂に際し差引の形になつたが、尤大に歳入欠損を補填する爲には餘りに減少に過ぎる所から先頃更に調査委員會を組織して猶效果的の方法考究中であつた所此種の委員會に有り勝る調査の停滯振廳内に關係者を召集一氣呵勢之を解決することになつた

不良珈琲の

を解決することになった

荷主嚴罰

新選舉法に於て

日は團代表者千餘名の參會を觀
 望されてゐるが政黨の訓練に乏
 しい此新團體が既成政黨の間に
 伍して果して如何なる統制振り
 を見せるか今のところ未知數と
 されてゐる

盛大に終る。

に在ると云はれてゐる

斷行か

底を期す

輸入量

爲替安が影響

シで昨年度の二百七十八萬三
四百九十六トンに比すれば實
九十三萬九千二百二十五トン
の減を示したが今其主なるもの
は昨年度と比較すれば左の
ものである、(單位トン)

海興植民地内の

英經營の植民地内にある

る爲に活躍する事と

二正金銀行撥鄉送金換算	一五釐九〇	三片八分
	米	鈔付
		爲替

の日文に僅かに引返
み其後氣配軟弱、プ

圓に付……七銖九十

エジョン(上) 一三 針五
ーリヨ 一四 針〇

モチアナ線方面へ出張
た各位の御配慮を希望

Ao Pequeno Lavrador

日本人諸彦

ソロカバナ地方の
果樹類 五、一八
の優良果樹類
種子類 中へ種
直輸入 芽殖入
肥料 純良品
各種（不純物の混合）
殺菌劑
野菜、果樹、
聖市ビネーロ、
コンメルシオ街五七B

マテ、
吊桶
草、花
牧草

Casa Tozan
MIZUKAMI & CIA
COMMISSARIOS
PRAÇA MAUA' 25
Caixa Postal, 911 - Telephone C. 2837 - End. Teleg. "Tozan"
SANTOS

今般左記へ移轉致候に付御通知申上候

移轉廣告

サントス市プラサ・マウア一二五

(舊場所ノ向側)

(郵函電信、電話從來通り)

カーザ東山

ミツカミ・イ・コンパニア

鳥取縣人 山根文太郎

右の者不都合なる行爲ありたる爲めジャンガーダ、リツコ
植民地日本人會より除名す

ビリタイ驛ジャンガーダ

リツコ植民地

日本人會

夏來る
 バームビーチ服
 最も輕快で且衛生的、布地は上等英國製
 洗仕立一百六十、百八十、二百、二百廿
 二百四十軒迄
 純麻服
 愛蘭國製布地、見る目も涼しく着て爽快
 洗仕立 百十軒
 ツツリル服
 白ツツリル服
 百二十軒
 八十五軒

移轉廣告
 御旅館 サンパウロ
 電話 二一九〇番
 停車場通二四番

各位の御引立に依り左配へ小賣部を擴張致し更に今回最新
和洋飲食店を併營につきまはは洩く皆様より日伯人に呼
び易く、且 店名 を御教命下され度當方にして採用
す意義ある したるものに對し薄志として伯貨
參拾軒也御贈呈申上ます
期日 九月二十日迄に入手のものに限る

聖市 イルモン・シンブリリヤナ街二〇
渡邊鉄砲店トナリ

村上菓子店
ボエータ街三番同製菓卸部

驛前で新しい部屋
お宿り下さる皆様からきつと御評判を頂きます

ホテル・バストス
移住地行郵便貨物諸事取扱所
ソロ線ランシヤリヤ驛郵便三四

品川 清一

OHARA, IRMÃO & CIA.
Rua Paula Souza, 46-B – São Paulo

移轉廣告

謹啓毎度格別の御引立に預り有難く御
禮申上候 陳者弊店儀從前通りの倉庫
にては手狭く候に付皆様の御便宜な聖
市目拔きの農産物取引中心地パウラ・
ソーズ街四十六番地Bに移轉仕り同所
に於て從前通り營業仕り候間何卒倍舊
の御愛顧を賜り度御願申上候 敬具

大原兄弟商會
聖市支店

パウラ・ソーズ街四十六番地B
電話 四一八三一

記

Trav. do Grande Hotel, 1 - Sob.

トラブエツサ・ド・グラ
ンデ・ホテル 一番一階

Caixa Postal 2975 — Telephone 2-1542

一九三一年九月八日

Sociedade Colonizadora do Brasil Ltda.

有限責任
ブラジル拓植組合

不良團檢舉に血眼

放送協會の肝煎―東京で

映像は小さいが鮮明

早大式、テレビジョンが先般の公開實驗に成功を収めて日本のテレビジョン放送も近きにあつてと期待されてゐる折柄、早大式となつて優秀な成績をあげてゐる濱松高工木柳健次郎教授が研究中の濱松高工式と近く東京で公開實驗を行ふ事となつたのである。因に駐米大使後任は水島三氏が有力であると。

線戦業職子女
レトクペス
査調の課計統市京東

結^け味^み沓^{くさ}の最^もで群^{ぐん}に來^き課^か

駐米出淵大使は十月十五日桑港
出帆の龍田丸で歸國するが、同
氏今回の歸朝に關聯して圖らず
も明春二月に政變あり、政友内
閣出現の噂を生むに至つた。即
ち來年二月休會明けの議會は解

秘密通話に

また新紀元

簡單で極く實用的

光線電話

有線無線の電信電話輻輳と共に
近來頻りに秘密通話の必要が唱
へられ、先頃は東大帝大千葉博
士が特殊の無線電話を考案した
が、今度は東大工學部教授鯉井
恒太郎博士が光線によつて語を
送受する光線電話を完成して秘
密通話の方法に新紀元を劃した
光線電話といふのは音波を光

光線いづれを用ひても極く簡單
に通信が出来る實用可能性の多
い考察として注目されてゐる。

九月から養成
有髮の女僧

四本願寺でなまめかしい有髮の
女僧を養成しやうといふ計畫は

男女共學にせよ

全國中等女教員大會で
様々なる改革意見

東京女子高師出身者より成る櫻蔭會と奈良女子高師出身者の佐保會との聯想で、最初の全國中等學校女教員大會が橫蔭女學校に於て開催された。全國から約三百八十名の中等女教員が出席し、文部省諮問案「我が國の現状に鑑み女子中等教育上特に注意すべき事項如何」の審議に入り、一、教育上でも女子は差別的待遇を受けてゐるが、男女は同等だから中等學校以上には男女共學の制度を設くべし、二、公立學校でも女子の校長を置き得る事とし、女子教育の發達を計らねばならぬ。

解剖

された
濱口氏

通教文部省宗教局から教師檢
査改正の認可があつたので
よく京都の中央佛敎學院に
子部を新設し、九月の新學期
から女坊さんの養成を始めた。
この目的は今後男僧同様女僧に
一山の住持たり得る資格を與
ふやうとした。これにも女の
職業職線進出が窺はれる。
これまで佛敎五十六派の住
持は全國に五万三千六百十六
人を數へ、そのうち女僧の住
持は一千百九十七名となつて
るが、これは華嚴宗、融通
佛、日蓮の三宗に限られて
り、西本願寺には女行者上
の教師と稱する布教師があ
たが、これは男僧と比較し
極度に資格を制限されたも
であつた。
今度の有譽の女坊さんは一山
住職にも浮び上らせるといふ
旨から高女卒業乃至同等以上
學力がある十七歳以上の女
集したが、新設の女子部に於
今後一ヶ年間に宗教史から禮
の要領までも詰め込もうとい
のである。

性的狂暴性矯正

少年を去勢す

東京少年審判所で續穢保護中の十八歳の一不良少年はその性根犯罪性を除去するために同審判所の承認のもとにこの種日本名所の承認に於て去勢手術を被せられた。疾病原因からでなく、意図したの日本では殆んど空前の事なので少年法並に衛生學選に新しい問題を投ずるものとして注目されやうとしてゐる。

OHARA, IRMÃO & CIA.

Telephone, 4-2831 — End. Tel. "OHARA"
RUA PAULA SOUZA, 46-B - SÃO PAULO

營業科目

支店	支店	本店
農產物賣買	農產物仲買	内外品雜貨商
同委託販賣	糯米工場	農產物仲買
食糧品卸賣	ノロエステ線ダアラパス町	精米、精棉、珈琲精撰工場
		ノロエステ線アラサツバ市

大原兄弟商會
 電話 四一三八三一
 鹽市パウラ・ソーザー街四十六番

CASA TOZAN

MIZUKAMI & CIA.
Commissarios de Café

カーザ東山

ソロカバナ線總代理人

木村孝太郎

各驛代理人

バラダアス

クアタ

ジョゼテオドロ

ブレジデンテ・ブル

デント

アルヴァレス・マツ

サント・アナスタシ

オ

ブレジデンテ・ウエ

セルスラウ

關

常

一

黒岩 秀吉

柞磨 宗一

今村 新藏

片岡 音市

木村孝太郎

澁谷 駒平

北バラナ地方總代理人

白井介仁

Fabrica de Plantadores

播種機
斷然値下



中井式
改正値段廿五軒
麥ノ印
播種機

工場の製作の播種機は堅牢無比調節自在使用簡易種子無偽芽良好の諸點に於て數年顧客評すの愛顧と伯國隨一の讚許とを賜はるに格安に精良なる播種機を供てより大量生産をなし格安に精良なる播種機を供給し此の恩顧に報んと計劃せる處本年に到り斷然値下を決定し得るに至れり一層の御愛顧を賜はる度偏に奉希候

カタンツバ市御郵二四
ルンバイ電話一〇一
中井工場
Nakani & Filhos
Caixa Postal 24
CATANDIVA

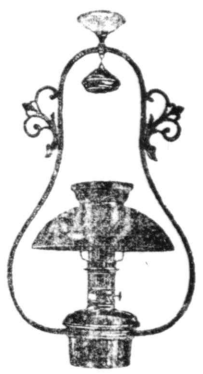
Kaigai Kogyo kabushiki Kaisha

[illegible]

チンタ類
農具類
瀨戸物一切
金銀類
オリーブ各種
鏡
ノオルミ
硫酸
ダレモリ
グエール
噴霧器

種各ブンラ

ブンラを便單極のすらい



芋の昭生植民地

海興産業部
サントス進出

職制改革の結果、レチスト、植民部から産業部に變つた同部の首腦者は、産業の營利化を計る第一の手段としてアルマゼン部の竹中氏をサントスへ派し、直接米

日蓮、日妙、……痛むか、深くはない。

弟子はいえ、お師匠様あんまりで御座います。私は我慢もいたしますが、勿體なう御座います。

（日蓮、日妙、……痛むか、深くはない。）

（お師匠様あんまりで御座います。私は我慢もいたしますが、勿體なう御座います。）

離婚法難產物語

此度民法起草小委員会では離婚法を規定することに略々決定したといふ。周知の如くブラジルでは今日まで離婚を許さず贅澤な戀愛享樂者はいよく必要の場合にはウルグワキに走りアルゼンチンに持ち出してまで夫々解決をつけて貰つたものであつたそれならば此處では最初から離婚問題は立法者の頭に上らなかつたかといふに、中々さうではなく今迄何となく識者の論議の的となつたが、惜しいかを何時も頑固な一派の爲に葬り去られたのであつた。

クロビス法案

ブラジル民法最初の起草者クロビス氏(Clóvis Beviláqua)は明かに再婚を認めてゐる該法案審議會 — オレガリオ・エルクラノ、ジョアキン・コスタ氏外三名が委員であつた——でもこれに意見を付して『一度離婚したものは再度の婚姻を許さう』と云ふ外二十名より成る當時の下院特別委員會でも之を承認、上院に於ても僅か字句の修正を見たのみで通過した。即ちブラジル民法では離婚を認めないのが原則であつた。

一九〇一年以後の下院

一九〇一年の下院で之が討論された時には離婚を承認するものとしなものと二派に岐れ、アエシオ・デ・アブリウ氏外五名

曲戲
上行出現

う。然し三七二十一日の内に
雨の降るのは當然何の不思議
もないではありませんか此の
法門はそんなものではありま
せん。正しきを行くものでは邪
を調伏しなければなりません
妙法華樂は破邪顯正折伏が本
願です。今日本國一切衆生が
無間大城に墮んとしてゐるの
を救ふのは日蓮あるのみです
(此の様に人々運のき、或は場
歸依して下さいましたか。
源之丞　せないでよいものです
か、日妙さん今迄の重ね)
の御無禮は………(涙を
流す)………高昌源之丞、刀
にかけてもこれからは、きつ
と上人様を御守護いたします
(源之丞きつとしてあたりを
にらむ)

と一蹴、ブラジリオ氏は
不義だ！

提出、
 否兩派
 選ばれ
 リコ
 園
 外では
 煮えく
 だが、
 カロー
 となつ
 だが其
 且つ非

といひ、ア
 殺人的法案だ
 生命の泉を涸
 すものだ
 戦慄、ルシオ・サントス氏は
 出来ぬ約束するウツ吐きだ
 と厲斥其他「非生理的のウツ外連
 だ」とか「放肆だ」とか散々
 の惡罵噴笑を浴びせかけた上最後
 にジュリオ・マリヤ牧師
 離婚を許すことは結婚を榮す
 ことだ、人間界に於ける結
 婚權を否定するものだ
 と理屈つたが、これによつて瞭
 かなる如く離婚の反對者は常に
 カトリック教徒だつたのである

ブリット議員の主張
 ブリット氏は其離婚法案を提出
 するに際して左の理由を述べた

うな別居の煩しさから免れるの
は万更好かぬでもあるまい。

御旅館 北田 清吉 アラサツバ市ブレシデ ンテ・モラ エス街六五 郵函 二〇八	物理療法界の權威、針灸 術と新進の光療、電療法 傳家 石井療院 ノロエステ線・ペンナ ボリス市 郵函一〇一	マ州カンボグランデ市 ドットル・ジョン・ベツソア街 イデアル薬局 内外藥品高等化粧品一切 宮城重吉郎 共賣 源河幸吉
--	--	---

Pharmacia Popular

DE HOEPPNER & SILVEIRA

Av. Minas Geraes-Prromissão - Caixa, 101

獨逸製

醫療器具類

農業用藥品

藥品一般

ブルマシ
ポプラー
ル

ミナス
ゼラス大通り

數家族の日本人諸君が居ります、チンビラ譯は此の街地の中にあります、詳細は支配人迄く

Fazenda Santa Maria
Est. Tymbira - Paulista

土地

カムベーナナス市自動車道より
三キロ、セツテケグダ耕地及
アニユマス耕地をロツデーア
ルケール以上にて賣り度し、
珈琲樹付或は無し所、公定
測量済、地權絕對安全、地價
一アルケール當り二コント以
上四コント、賦拂にても可
御照會は

Rua Dr. Quirino, 1260
Campinas

貸地

パウリスタバ線チンビラ驛在の
棉作、雜穀作に好適地、アル
ケール宛り百五十ミル四年間
を期間として貸します、現在

聖市に接續するバライベ上方
の沃地約三十アルケルス及び
ジャカレの耕作或は工場地に
通する電燈並に電話のある土
地を格安に賣ります。
御希望の方は毎日午後四時よ
り七時迄に左記く
Av. Celso Garcia, 105
S. Paulo

尋人

奈良縣人

牧野市次郎

右の方に急用有之に付本人若しくは同氏の現在住所御承知の向は至急當館宛御一報被下度し

昭和六年八月二十六日

在リベロンブレイト

日本總領事館分館

[illegible]

GARAGE CONGRESSO

プラサ・ジョンメンデス

電話 一一・〇〇八一

實自動車は

同胞運轉手の居る

カラージ・コングレツ

御家庭常備薬

日本人には日本人の体質に適應して調劑されたる有
名薬を常に各御家庭に備へられん事を希ひます。

TEL. 2-0081

聖市旅館同業組合 大阪商船社會指定符取所次				
コンセレーロ・フルマード街十六 小川 旅 館 電話 二一四四七六番	ガニ・タ街十一 上地 旅 館 電話 二一九二二 郵便 一二二五	コンセレーロ・フルマード街二 大和 旅 館	コンア・ア・ビシニヤール街廿一 旭 旅 館 電話 二一七八二番	コンア・ア・ビシニヤール街一番C二階 末廣 旅 館 電話 二一五六三八番
マリア街二九一 東京 旅 館 電話 四一四七六番	コンア・ア・サルセーダス街四一 常盤 旅 館 電話 二一三六九〇番			

ソロカバナ線
オウリニヨス

不式
投薬

治療

ラホーム、視神經麻痺、
神經痛一般、慢性胃腸
内臓諸病、筋違背推調節
順、皮膚病一切、マルク
病根治

醫藥に効なき慢性諸病

ヂヤテルミ科 電気療
光線科

トル、ペウリノフイリヨ

役員選衡の結果左の諸氏就任しました		改めて大方諸君に廣告します	
九月二日			
員		マリリヤ中央日本人會	
理事	原多七	花岡明生	部長
全	小川健六	村上義雄	部長
全	富永今朝一	清水楠太郎	計
全	濱田虎雄	山下唯一	部長
顧問	奥村平作	城間善吉	部長
全	島田正吉	岡田徳太郎	部長
全	梅田友次郎	梅田金次郎	部長
名譽幹事	大場鶴松	岡本専太郎	事

NIPPAK SHIMBUN

Jornal Japonês de maior circulação no Brasil

Ano XVII

São Paulo — Quinta-feira, 10 de Setembro de 1931

Num. 745

NIPPAK SHIMBUN

Director-Proprietario:

SACK MIURA

Redactor da pagina brasileira José Solé

Redacção, Administração e Officinas

Rua da Liberdade, 146

Caixa Postal, 375

Telephone, 2-3926

Endereço Telephonico "NIPPAK"

SÃO PAULO — BRASIL

ASSINATURAS

Para o Brasil:

Por anno 30\$000

Por semestre 16\$000

Numero avulso \$500

Para o Exterior:

Por anno 60\$000

ANUNCIOS

Temos á disposição dos interessados

uma tabella completa de preços para an-

uncios nestafolha. Telephone 2-3926

A expansão do nosso turismo

E' cada vez mais crescente o interesse que os capitães brasileiros despertam em todos os paizes cultos e civilizados.

E' raro o vapor japonês que não nos traz algum pesquisador, estudantes ou turistas, do longinquo Extremo Oriente.

A fama da maravilhosa belleza dos nossos scenarios, da opulencia da nossas lindas cidades vae ganhando mundo, fazendo nascer em todas as imaginações o desejo de conhecer de perto todos os encantos e seducções das capitães brasileiras.

Dous telegrammas, divulgados pela imprensa, mostram bem que não exageramos nessa affirmativa. O primeiro, procedeu de Buenos Aires, informava que a Prefeitura local, concedeu a importancia de cincuenta mil pesos á grande cavada de estudantes, que, em viagem de turismo, esteve no mez passado entre nós. O segundo despacho telegraphico, oriundo de New York, noticia que se organizam alli numerosas caravanas de turistas, para visitar as nossas lindas cidades, ainda este mez.

Felizmente, a grande industria moderna está entre nós em franca expansão. Já era tempo da nossa incomparavel cidade, com a formosura da sua natureza e opulencia do seu progresso material, prodigalizar-nos os lucros que a França, a Suissa, o Japão, a Alemanha, a Italia e todas as grandes nações cultas obtêm com as suas industrias de turismo.

O encarregado dos negocios do Japão

Encontra-se restabelecido da grave enfermidade que o reteve ao leito varios dias o sr. Nuida, encarregado dos negocios do Japão no Rio de Janeiro.

Sua senhoria foi visitada pelo dr. José Roberto de Macedo Soares, introductor diplomatico, em nome do sr. ministro das Relações Exteriores.

Noticias e telegrammas do Japão

(Serviço especial do NIPPAK SHIMBUN e dos jornaes)

Um novo conflicto sino-japonês

O Japão reclama contra a execução de um official nipponico, na Mandchuria

Tokio, 5 — As relações entre o Japão e a China estão novamente estremecidas sendo que desta feita não parece muito facil aplacarem-se as divergencias.

As autoridades japonezas exigem uma cabal explicação a respeito da execução, na Mandchuria, do capitão Nakamura, do exercito nipponico. O julgamento do official japonês foi rapidissimo e antes de qualquer acção de defesa por parte do mesmo foi condemnado e fuzilado como espião. Espera-se que as autoridades chinezas empreguem os seus esforços no sentido de evitar as manifestações anti-nipponicas que estão sendo feitas em varias cidades da China.

E' contra a segurança publica... a redução nas despesas policiaes

Tokio — O projecto da redução nas despesas policiaes, organizado pelo nosso ministerio da Fazenda, vem sendo combatido com tenacidade por parte das autoridades da nossa segurança publica. Presentemente temos neste Districto 1.938 guardas, cabendo á guarda de 139 casas para cada um delles, no perimetro urbano e, 255 casas no perimetro rural. Essa porcentagem, segundo as autoridades que combatem o projecto de redução, é ainda insufficiente para completa garantia da nossa população.

O problema da prata

A proxima conferencia

TOKIO — De fonte autorizada annuncia-se que o Japão tomará parte na Conferencia Internacional da Prata, a abrir-se a 17 do corrente em Paris.

Essa conferencia, que será de peritos financeiros, tem o objectivo especial de estudar o problema da prata, e terá caracter official, reunindo-se sob os auspicios da Camara de Commercio Industrial.

A Conferencia Geral do Desarmamento

A delegação do Japão será chefiada pelos embaixadores em Londres e Bruxellas

Tokio, 4 — Annuncia-se de fonte autorizada que a delegação do Japão á proxima Conferencia Geral do Desarmamento será chefiada pelos Srs. Matsudaira e Sato, embaixadores nipponicos em Londres e Bruxellas, respectivamente.

AVIAÇÃO

Uma visita de Lindbergh á embaixada dos Soviets em Tokio

Tokio — O coronel Charles A. Lindbergh, acompanhado de sua esposa, esteve na embaixada dos soviets, onde foi agradecer ao representante daquelle paiz a gentileza de que havia sido alvo por parte das autoridades da Ilha de Karagin e de Petropavlovsk, durante o vôo que acaba de realizar entre Nova York e Tokio.

Durante a visita, que se revestiu da maior cordialidade, o coronel Lindbergh declarou que ainda não estava resolvido definitivamente o tracto de regresso, accrescentando entretanto, estar bastante inclinado a voltar pela Siberia.

Super-exportação na segunda decada de Julho

Tokio — O nosso commercio exterior na segunda decada de Julho ultimo se encerrou com uma super-exportação de 5.217.000 yens, segundo os dados que seguem:

Porto	Exportação (yens)	Importação (yens)
Yokohama	8.925.000	6.963.000
Kobe	11.039.000	7.832.000
Osaka	5.965.000	5.095.000
Nagasaki	164.000	352.000
Moji	1.033.000	660.000
Hakodate	124.000	268.000
Nagoya	852.000	1.642.000
Yokkaichi	214.000	208.000
Shimizu	267.000	65.000
Kagoshima	2.000	31.000
Odaru	257.000	18.000
Wakamatsu	122.000	610.000
Shimonoseke	7.000	10.000
Total	28.791.000	23.754.000
No igual periodo dn anno passado	33.692.000	29.361.000
Desde 1 de Janeiro	639.045.000	749.682.000

A travessia directa do Pacifico

Tokio, 5 — Os aviadores norte-americanos Allen e Moyle levantaram vôo ás 7 horas e 47 minutos de hontem, com destino a Shabishiro, contando atravessar o Pacifico amanha, em direcção a Seattle, nos Estados Unidos.

Tokio, 6 — Os aviadores Allen e Moyle levantaram vôo do aerodromo de Shabishiro, para tentar a travessia do Japão a Seattle nos Estados Unidos.

O avião perdeu o contacto com o solo em condições atmosféricas excellentes, ás 17,30 horas, hora local.

Final do reide Tokio-Roma

A bordo do "Kasima Maru" viajam de regresso ao seu paiz os aviadores japonezes Kurimura e Kumakawa, que realizaram com inteiro exito o reide Tokio-Roma.

Esses aviadores detiveram-se em Roma varios dias tendo visitado Napoles onde foram muito festejados.

Desastre Maritimo

Tokio, 5 — Telegramma de Seul (Coréa) annuncia que o paquete allemão "Burgendand", em viagem de Tsing-Tao para Nagoya, encalhou nas proximidades da ilha Fu-Kou-San soffrendo graves avarias. A tripulação, composta de 60 homens e 25 passageiros haviam abandonado o vapor nos escaleres de bordo.

A ultima hora annuncia-se que o "Baikail-Marú" partiu para o local do sinistro em socorro dos naufragos.

NOTAS DIVERSAS

O nosso café no consumo mundial

Ultrapassou o total de 25 milhões de saccas o consumo de café no mundo, no periodo de 1930-1931, não estando incluído nessa somma o café trocado, recentemente, por trigo americano. Maior, porém, foi o volume do producto collocado no periodo anterior, o qual ascendeu a cerca de 25 milhões e 500 mil saccas. Segundo os dados recolhidos por uma importante casa importadora estrangeira, já se nota sensível augmento, no periodo de janeiro a julho deste anno, relativamente aos primeiros sete mezes de 1930.

Verificando-se outros detalhes, observa-se que a quota brasileira, no consumo mundial, apresenta um augmento de um milhão e quasi 400 mil saccas ou 15,8 %, ao passo que houve um decrescimento de 38.000 saccas, na quota englobada dos outros paizes productores.

Folhinhas para 1932

encontra-se na

TYP. "NIPPAK"

Rua da Liberdade, 146

Tel. 2-3926 — S. PAULO

O pintor Yazaki

Convidado pelo dr. Iiro Yamazaki, ministro plenipotenciario do Japão em Buenos Aires, para realisar, na capital portenha, uma exposição artistica, seguiu para aquelle porto platino o pintor japonês Chiysti Yazaki, cujas exposições despertaram, recentemente, te nessa capital e no Rio de Janeiro vivo interesse.

S. s., que se demorará na Argentina tres mezes, mais ou menos, pretende, no seu regresso effectuar nesta cidade uma exposição de quadros em que serão representados aspectos característicos, da cidade, do seu porto e dos seus arredores.

CAFELANDIA

Grande competição de Lucta Romana e Jiu-Jitsu

Organizada pela Associação Japoneza de Cafelandia, deverá ter lugar nos dias 26 e 27 do corrente naquella adiantada cidade, uma bem organizada competição de Lucta Romana e Jiu-Jitsu onde comparecerão os campeões japonezes que se encontram actualmente em S. Paulo.

Até o dia 20 do corrente estará aberta na sede daquelle sociedade o lista para inscricção dos esportistas que quizerem abrilhantar os encontros na arena da Associação Japoneza de Cafelandia.

O feminismo no Trabalho

Interessante estatística organizada pela municipalidade de Tokio

TOKIO Ha muito tempo que esta municipalidade vem se empenhando na organização de uma estatística exacta sobre o feminismo empregado em diferentes actividades, tendo feito "enquetes" nas companhias e bancos com o capital superior a 500.000 yens e fabricas com mais de 30 operarios. Responderam ás perguntas formuladas pela comissão desses inqueritos 16.000 pessoas, dentre 21.000 pessoas ouvidas.

Pelas respostas verificamos que 87 % desse numero são damas de 16 a 25 annos de idade e solteiras, havendo 258 damas com mais de 50 annos de idade. Com relação aos ramos, esse numero pode ser dividido da seguinte maneira: commercio, 9.000; credito e seguros, 3.000; industrias, mais de 41 % do total. 5.000 desse numero são operarias de fabricas; 3.770 trabalham nos escriptorios; 2.402 nos balcoes; 1.048 são dactylographas. 66 % dellas

Dr. S. TAKAOKA

MEDICO — OPERADOR

Rua Cons. Tufado, 45
Tel. 2-4075

S. PAULO

Explosão a bordo de um cruzador

TOKIO, 5 — Explodiu o reservatorio de gaz do cruzador "Notoro" no porto de Yokosaka. Em consequencia do accidente, seis tripulantes morreram afogados e trinta ficaram feridos.

Os cruzadores "Asigara" e "Nachi" auxiliaram os resgates de extincção do incendio que irrompeu a bordo do "Notoro".

HITOMI

A excelsa esportista japoneza A sua vida e a sua obra

Ha 2 de Agosto passado falleceu a illustre esportista senhorita Kinuye Hitomi, uma das mais grandes figuras do atletismo.

a sua morte, realizou um trabalho de verdadeiro entusiasmo, valiosissimo para o esporte que era sua verdadeira paixão.

Escrevendo para o "Osaka Mainichi", grangeou maior popularidade ainda na sua patria, como já a possuia como athleta campeã. Mesmo assim com toda série de affazeres que tinha no jornal, a japoneza Hitomi, não se descuidava de seu preparo technico, competindo continuamente, numa actividade á toda prova.

Em 1927, participou e capitaneou a equipe de suas patricias á 2.a Olympiada Feminina, realizada na Alemanha e onde abteve resultados dignos de nota.

Em 1928 concorre ás Olympiadas de Amsterdam, participa nas provas de extensão e nos 100 metros rasos, conseguindo boas classificações. E' segunda nos 800 metros rasos com 2' 17" 3/5, perdendo para a athleta allemã Radach que registrou 2' 16". Dias depois, ainda nas Olympiadas, supera o recorde do mundo dos 400 metros rasos com 59".

E a sua actividade athletica e jornalística prosegue febrilmente. Em 1929 no campeonato feminino do Japão supera o recorde do

mundo dos 100 metros rasos com 12" e dos 200 metros com 24" 6/10. Salta logo depois, ainda nesses torneos 9 mts. 07 em distancia que é outro recorde do mundo!

E' assim recordista mundial dos 100 metros com 12", dos 200 metros com 24" 6/10, dos 400 metros com 59", do salto em distancia com 6 mts. 07 e do triplece salto com 11 mts. 625!

E' recordista do Japão dos 50 metros com 6" 4/10, dos 100 com 12", dos 200 metros com 59", dos 800 metros com 2' 23" 7/10, do salto em distancia com 6 mts. 07, do triplece salto com 11 mts. 625, do salto em altura com 1 mt. 45, dos 80 mts. com barreiras em 13" 4/10, do arremesso do disco com 34 mts. 18 e do arremesso do dardo com 35 mts. 96!

Ahi está linhas acima o que foi a actividade athletica dessa valorosa jovem japoneza que agora acaba de desaparecer com seus risinhos 26 annos de idade, quando se preparava com o entusiasmo sadio de sua mocidade, para as proximas Olympiadas de Los Angeles!

A morte surpreendeu-a em Tokio, quando recém chegada de uma excursão athletica por toda a Europa central, de volta das 3.a Olympiadas, realizadas em Praga, onde levava e capitaneava mais uma vez a equipe feminina do seu paiz e onde obtivera, como de costume, brilhantes resultados.

O seu trabalho intenso no jornal "Osaka Mainichi" do qual era activa redactora, obrigava-a muitas vezes ao serviço nocturno fatigando-a em demasia, o que foi um dos factores de seu prematuro desaparecimento.

Deixa assim a japoneza Hitomi, um grande claro no atletismo feminino mundial. Ella era senão uma das mais perfeitas, a maior athleta do mundo.

HITOMI, desapareceu aos 26 annos de idade. Nascida na cidade de Okoyama, no Japão, desde cedo iniciou-se na pratica dos esportes, para o qual apresentava innumerables possibilidades.

De facto, assim foi. Com dezeseis annos de idade já era campeã de tennis no collegio onde estudava e uma das principais alumnas, estudiosa e dedicada.

Naquelle época, isto é, em 1922, o atletismo feminino começava a se desenvolver no Japão, chamando a attenção das bellas "geishas" daquelle paiz.

Assim, a jovem Hitomi, que praticava todos os esportes na Escola de Gymnastica Nikoito, em Tokio, iniciou-se no atletismo, criando em 1925, nas competições internas, concorrendo nas provas de velocidade e nas de saltos.

Esse foi o verdadeiro inicio de sua gloriosa carreira. Em 1926, competindo nos campeonatos femininos do Japão, onde compacta multidão se comprimia no magestoso estadio de Tokio, a athleta Hitomi, surpreendendo todos pela sua destacada desenvoltura nas provas que concorria e então sobrepuja com grande differença, o recorde mundial feminino do triplece salto com 11 mts. 625.

Esse, um dos seus primeiros exitos.

Nesse mesmo anno, fazendo parte do corpo redactorial do bem feito jornal "Osaka Mainichi", de larga tiragem em todo o Japão, como redactora esportiva, desenvolve larga campanha, com seus artigos convincentes e bellos, em prol do maior desenvolvimento athletico em seu paiz, incentivando suas praticas para a pratica do atletismo.

Essa campanha teve uma sensacional repercussão, produzindo beneficos effeitos, e seus artigos sempre foram accetos com sympathia. Nesse posto, que se orgulhava de possuir e que manteve até